

氏名	孫 偉
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博甲術第17号
学位授与の日付	平成19年9月30日
学位授与の要件	学位規程第5条
学位論文の題目	現代中国語の時間表現 —日本語との構造的対照研究—
審査委員	主査 今泉 喜一 副査 塚本 慶一 副査 金田一秀穂

学位論文の要旨

現代中国語の時間表現は、大きくテンスの表現とアスペクトの表現に分けられる。多くの研究では、動態助詞「了、着、過」と、「以前、将来」などの時間名詞および「曾經、将要」などの時間副詞がテンスとアスペクトの標記として分析の対象となっている。中国語にはテンスという文法体系が存在していると多くの研究者が認識しているが、その具体像をどのように描くかについては、まだ研究を重ねている段階にある。研究方法としては語彙手段と語法手段を手がかりにすることが確認されているが、片方の手段のみを重視した研究や、単文と複文を混同してテンスを解釈している考察などが多く見られる。とくに、多種類の時間を表す要素が併用されている場合におけるテンスの判断基準、時間表現の文中での役割などについては明らかにされていない。また、多様な文のそれぞれに多種の時間を表す要素が存在している場合、どのような手順にしたがって分析を行うかに関しても、明確な解答がないままになっている。

中国語のアスペクト研究においては、研究者が分析に用いる表現（語法と語彙表現）の違いによって、アスペクトの（開始、完了などの）名称がいくつの種類にも分かれている。アスペクトの存在形式と表現方式については、動態助詞「了、着、過」を中心に、動態助詞「來着」、時間詞（時間名詞と時間副詞）、準アスペクト（動）詞「開始～、継続～、～完」などを取り入れた考察も存在する。もちろん、このような方法を用いた研究は中国語アスペクトの基本である「進行」と「完了」の対立を分析し、出来事が位置している（開始または進行あるいは完了の）局面とその表現法をとらえることはできる。しかし、話者の位置もしくは出来事の時間的位置の移動にともなって、言及される局面は変わってくる。そのうえ、動態助詞「了」と「着」あるいは「過」

が互換可能である場合もあるので、さらに綿密な考察が必要となっている。

このようなことを念頭に置き、本研究では、中国語の動態助詞及び時間詞などを日本語図形表示法をもとに分析しつつ、日本語との構造的な対照研究を通じて、中国語のテンス・アスペクト体系を考察している。第1部では、日本語図形表示法を導入し、分類された単文、複雑単文、二節複文、多重複文を対象に、時間を表す動態助詞や時間詞等がどのような役割を果たしているかを分析することを通じて、中国語テンスに関する考察が行われている。

中国語の未来のテンスは時間名詞によって表されるので、語法的にテンスの体系は存在していないというのがこれまでの定説である。それに対して、本研究では、未来を表す場合には動詞の後ろに理論的に要請される「0 動態助詞」が入る位置があると主張し、裏づけている。これにより、過去を表すには動態助詞「了、過」が動詞に付き、進行中の現在を表すには動態助詞「着」が動詞に付き、一般現在および未来を表すには「0 動態助詞」が動詞に付くというかたちで、単文あるいは複文を統一的、体系的に扱うことができるようになっている。この「0 動態助詞」の存在を確認したことによって、中国語の相対テンスは、「以前・同時・以後」によって構成され、「以前」を動態助詞「了、過」で、「同時」を動態助詞「者」で、「以後」を「0 動態助詞」で表すことができる、と考えている。これにより、中国語には語法的な絶対・相対テンスの体系がとらえられることになる。また、日中両言語の対照研究をする立場から見れば、中国語の動態助詞のみが用いられる場合には、「了、過」が日本語の「タ/ティタ」と、「着」が日本語の「テイル」と、「0 動態助詞」が日本語の「ル」とそれぞれ対応することが明らかとなった。このようなことから、中国語と日本語の体系と体系の対照研究が可能になったといえる。

中国語では動態助詞以外の名詞や副詞などを用いて時間を表す方法もよく用いられる。あるいは、動態助詞と時間詞を同時に用いて時間を表すこともある。表面的には動態助詞を用いる語法表現法と時間詞を用いる語彙表現法が別の体系で対立しているかのように見える。しかし、テンス表現を構造的に分析すれば、語法表現と語彙表現は中国語のテンスを表す有機的なつながりをもつ二種類の表現法であることが分かる。動態助詞が用いられ、具体的な時間を示す必要がない場合には、時間詞は用いられない。時間詞で十分に時間を表している場合には、動態助詞が省略される。本質において、両者は中国語のテンスを表す異なった表現なのである。語法表現を省略できる性質を持つ中国語は、時間を表す名詞や副詞が一緒に用いられても語形変化が欠かせない日本語とは異なる側面を見せている。中国語のテンス体系は、語法体系を基本とし、語彙体系が語法体系を補完するというやや複雑なテンス体系をなしている。この複雑なテンス表現が用いられる中国語では、出来事のテンスを確認する場合、まず動態助詞、次に時間詞、それから文脈という優先順序で見えていくのが妥当である。

一方、二節以上の文に現れる絶対・相対テンスの存在も多様さを見せている。複雑

単文の従文出来事が絶対あるいは相対テンスのいずれをもとることができ、二節複文における各単文の出来事は基本的にそれぞれが絶対テンスをとるが、片方が相対テンスをとることもある。また、多重複文では、ひとつの文の出来事が絶対テンスをとり、それ以外の出来事が相対テンスをとる形式もあるが、全ての出来事が絶対テンスをとることもありうる。さらに、それぞれの出来事がとっているテンスを表すには、動態助詞や時間詞などといったさまざまな時間を表す要素を用いることが出来る。このような複数の出来事のテンスが多様な表現法で実際に表されているときには、基本的に単文と同様に動態助詞、時間詞、文脈という順序で見なければよいのである。しかし、文を簡潔にするために、時間を表す要素の省略が行われている場合がある。このような場合には、動態助詞、時間詞もしくは文脈を通じての理論上の分析のみで十分に理解することは難しくなり、図示をしてはじめて出来事の時間的位置を正確に判断できるようになるケースが多々ある。図形表示法は中国語のテンス体系を究明するのに、非常に有効な手段であるといえる。

第2部では、図形表示および日本語との対照研究を通じて、中国語アスペクトの基本である「進行」と「完了」の対立を分析し、移り変わる時間に応じて出来事が位置している（「開始、進行、完了」の）局面とその表現法をとらえようとしている。

テンス・アスペクトの構造を図形で表示・観察したことによって、中国語テンスの「未来」を表す「0動態助詞」がアスペクトの「開始」を表すことができると判明した。これにより、中国語のアスペクト体系は、日本語と同様に7つの言及点を有していることが明らかになった。この7つの言及点の表し方は、言及線77の「開始直後」が動態助詞「了」によって表されるのをはじめ、「0動態助詞」が「開始」を、動態助詞「着」が「進行、持続」を、動態助詞「了、過」が「完了」を表すという表し方である。勿論、テンスと同様にアスペクトの表現にも省略の現象が見られる。すなわち、時間詞などといったいわゆる語彙表現でアスペクトを表すことが存在している。しかし、このような表現が用いられた文でも、ごくわずかなものを除いて、多くの動詞の後ろに動態助詞を入れる（復元する）ことが可能である。つまり、動態助詞が省略されていると考えることができる。逆に、ある言及点を語彙表現を通じてしか表せないという状況も存在している。中国語のアスペクトも語法表現を中心にし、語彙表現がそれを補助して完成した表現方法であると考えられる。これにより、中国語アスペクトの体系（7つの言及点）と表現法（語法表現と語彙表現）は規則的にまとめることができる。

日本語との対照研究においては、日中両言語のアスペクト表現に「ずれ」という現象が存在している。この問題の中心になっているのは、表面上では日本語の語形変化である動詞の「ル／タ、テイル／テイタ」形と中国語の動態助詞「了、過、着、0」との対立であるが、本質的には同一言及点における言語表現の違いである。表面にある表現の違いに注目するあまり、本質である言及点を誤認してしまうことによって「ず

れ」が生じる。また、「未来完了」を中国語では動態助詞「了」が表すのに対して、日本語では準アスペクト補助動詞「シマウ」で表すように、準アスペクト（動）詞でアスペクトを表す方法がある。この準アスペクト（動）詞の使用をめぐる課題がある。中国語の動態助詞が用いられるか否か、日本語の準アスペクト補助動詞に語形変化が生じないか、どのような対応関係にあるか、などの問題が出ている。異なる言語体系にある品詞の分類やアスペクトの表現においては、日中両言語の違いも当然のように存在している。対照研究を含めてのアスペクト考察に際しては、図形表示を通じて言及点を見極める方法が正確にアスペクトの構造をとらえられる主要な手段であり、非常に重要な研究方法となっている。

以上のように、本研究では日本語との構造的対照研究から中国語の時間表現を考察してきた。勿論、これだけでは中国語動詞のテンスとアスペクトの体系を完全にとらえることはできない。否定を表す中国語の「不・没」と日本語の「ない」との対応関係をどのように見ればよいのか、どのように中国語否定形におけるテンスとアスペクトの構造を考えるべきか、などの課題が依然として残っている。しかし、この対照研究により、中国語のテンス・アスペクトが体系として整備され、完成される可能性の高いことが示されたと考えられる。

審査結果の要旨

【論文の内容】 現代中国語のテンス・アスペクト（時間表現）を、日本語研究で開発された時相表示図形モデルを参考に綿密に研究し、詳細に論述している。

【論文の意義】 中国語の従来の研究では、時間表現は動詞・動態助詞によるよりは、時間詞や文脈によって示されるものと考えられ、テンス・アスペクトが体系として存在するものであるとは考えられない傾向にあった。最近では、絶対テンス・相対テンスの概念そのものは認められるようになってきたものの、その体系を具体的にどのように描くかについては、模索が続けられている段階である。

このような状況の中にあって、論者は本論文において、①中国語の動詞・動態助詞及び時間詞などを日本語図形表示法をもとに分析・考察し、中国語のテンス・アスペクトを体系として描き出すことの基礎を固めることに成功している。それに伴い、②述語動詞の直後にテンスを担う動態助詞の入る位置を設定し、③その位置に何も入らない未来等の表現の場合においては「^{ゼロ}0 動態助詞」を理論的に要請することを提唱している。また、ほかに以下のことが特筆される。④時間詞の使用により動態助詞が意味的に過剰となり削除される場合があるが、これは動態助詞が無意味になるためではなく、時間詞が補助的代用となるためであるとし、両者は対立関係ではなく補完関係にあるとしている。⑤図示法は日本語図示法に倣いながらも、中国語独自の方法を開発している。……このほかにも新見が多々ある。

【論文の評価】 当該研究分野における先行研究が少なからず存在する中で、日本語との構造的対照研究というきわめて斬新な方法により研究が遂行され、その結果として中国語のテンス・アスペクトが体系として整備され、完成される可能性の高いことが示されることになった。審査者一同はこの点を高く評価した。